

自分の持っている本を何回も繰り返し読まれ、もう読む本がなくなったというので出征して留守になっている兄さんの部屋に行き、兄さんが持っている本を好きなものからみな読んでしまい、最後に一冊だけ残ったのが私の書いた「通俗中根式速記法」だったそうです。それまで兄さんたちが速記をやっていることは知っていながら、少しも関心がなかったのだそうですが、もう読む本がなく、最後に残ったこの本を読まれたのだそうです。そして本の中に書いてある「はしがき」を読み、「識者に檄す！」を読んで非常に感動され、それからすっかり速記のとりこになって勉強されたのだそうです。戦争中は軍隊に行っておられたのですが、速記だけでなく、その真面目な勤務ぶりが上官に認められ、何回も賞状をもらっておられるようでした。終戦後は白浜に帰られ、ご両親経営のみどり館の一室を教室にして、近所の子供たちを集めて速記を指導されていたのです。練習問題を読まれる声は熱誠のあまり浜まで聞こえるといわれるほど大きな声で読まれていたそうです。子供たちの親も夜が遅くなっても、山崎さんのところだったら心配ないといわれていたほど信頼を受けて指導されていたのです。その後、兄さんの英生さんといっしょに、県議会の速記者になっておられたこともあったのですが、その間に南海電鉄が天見というところに、ほったらかしにしていた南天苑という温泉旅館の再建を引き受けられることになったのです。一度は失敗してやめられたようでしたが、更に思い直して再建にあたられ、非常な苦勞を重ねられた結果、最後にはこれを自分のものとして、一流の温泉に仕上げられたのです。その経営ぶりはガラス張りで全国の温泉旅館の